

# 内診時の羞恥心の軽減 ～内診カバーの実用性の向上にむけての取り組み～

4階南病棟 仁戸田理美・吉村麻衣・南川宏美  
福田亮子・前田生子

Keyword:内診カバー 羞恥心

はじめに

産婦人科では、内診を受ける患者が殆どであり、女性が性的な面で配慮され診察を受けられるよう援助が必要である。前回の研究で、内診時の患者の羞恥心は大きく、内診カバーを使用する事で、羞恥心の軽減に効果がある事を報告した。しかし現在、従来の内診カバーを設置しているが、使用している事が少ない。そこで内診カバーの使用頻度が少ない原因を明確にする為、質問紙調査を行い、実態を把握した。同時に看護師へ実用性の向上の為に内診カバーの改善点を検討してもらった。その結果、内診カバーの改良と、看護師による説明の統一を図ることで、使用頻度が向上し、羞恥心軽減への成果が得られたので発表する。

## I 研究目的

カバーの使用頻度の少ない原因を明らかにし、実用性の高いカバーを改良、使用することで患者の羞恥心の軽減を図る。

## II 研究方法

1 研究対象：病棟看護師改良前 16 名、改良後 21 名、内診を受けた患者 184 名(A 群：カバー改良前 108 名、B 群：改良後 76 名)、

2 研究期間：平成 19 年 8 月～平成 20 年 8 月

### 3 研究方法

#### 1) 質問紙調査

内診を受ける入院患者、看護師に内診カバーの改良前後で質問紙調査を行う。

#### 2) 倫理的配慮

研究の主旨及び個人情報保護を文書にて説明し、回答をもって本調査に同意が得られたものとした。

## III 結果

患者・看護師の意見では「診察時の邪魔になる」「装着しにくい」「衛生上良くない」という意見が多かった。そこで、①患者自身ですぐに着脱できる②診察時の妨げにならない③清潔感がある④使用方法がわかるに重点をおき、従来の内診カバーを元に①足底ありマジックテープ式②足底なしマジックテープ式③足底ありゴム式④足底なしゴム式の 4 種類を作製した。説明方法については看護師へラミネート・実物を用いて説明する事を呼び

かけ徹底した。その結果、患者に内診カバーの説明を行う看護師は改良前 5 名(31%)から改良後 18 名(90%)に増加した。

また、内診カバーを使用する患者は A 群 35 名(38%)から B 群 45 名(90%)に増加した。両群でカイ二乗検定を行ったところ有意差を認めた。B 群では内診カバーを使用した患者の 35 名(78%)から羞恥心が軽減したという結果が出た。また、その中で③の足底あり・ゴム式を選択する患者が多かった。

## IV 考察

今回の研究で、内診カバーを改良し、患者への説明方法を徹底・患者自らの選択により、使用頻度を大幅に増やす事ができ、その結果、羞恥心の軽減に繋げる事ができた。使用率に有意差を認めた事により、患者は内診カバーの存在を知れば使用するという事が立証できた。内診カバーの実物を用いて装着方法の説明を受けた事は視覚的に捉える事でイメージ化ができると同時に、認識度を高める為に効果的であったと判断できる。また B 群の 42 名(88%)が「内診カバーをまた使用したい」と答えた事から、今後も内診カバーの使用を薦めていき、羞恥心の軽減に努めていく必要がある。

羞恥心と年齢・出産歴・結婚歴では有意差はなかった。このことより、内診を受ける全ての患者に看護師は羞恥心の配慮を行う必要がある事が明らかになった。

改良後も、患者から「使いにくかった」「カバーが不潔な感じがする」という意見があった。今後の課題として短時間で簡便に着用できる内診カバーを工夫する事やカバーの枚数を増やす事が挙げられる。

## V 結論

1. 内診による羞恥心は、年齢・結婚歴・出産歴には関係がなく、内診を受ける全患者に羞恥心への配慮が必要である。
2. 内診カバーの存在を知る事により使用頻度は上昇する。
3. 内診カバーを使用する事で羞恥心は軽減する。